

令和元年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

「総合的な学習の時間」と教科学習を、「市民性」「探究」「協働」の視点で見直し結びつけ、そこでの「ディープ・アクティブ・ラーニング」を可能にするカリキュラムの開発と、その指導・評価方法の研究

2 研究開発の概要

今後の社会で重要と考えられる「市民性」「探究」「協働」の視点から、総合学習と教科学習を見直しつつ両者を結びつけ、「ディープ・アクティブ・ラーニング」を可能にするカリキュラムの開発と指導・評価方法について研究する。特に現在の「総合的な学習の時間」をもとに「探究的市民科」を新設し、既存の教科との連携、相互の活性化を図ることを中心課題とする。

- ① 本校で長年取り組んできた「卒業研究」とそれに連なる他の総合学習が、上記3つの視点から見てどのような資質・能力を育成するのかを検討する中で、これまでの「総合的な学習の時間」とは異なったイメージの個人探究学習の可能性について考え、具体的なカリキュラムを提起したい。
- ② 総合的な学習である新教科「探究的市民科」と、新教科「情報・技術科」「生活デザイン科」を含む全ての教科学習を上記3つの視点からつないでいくという新しい試みを行い、その指導と評価について検討したい。

3 研究開発の経緯

(1) 研究の経過 ※太字はその年度の中で重点的に行った内容

	実施内容等
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 質的研究についての学習 ・ 「卒業研究」指導・困難点・評価に関する教員アンケートの実施 ・ 上記アンケート結果から見られる、教員が卒業研究を通して育成しようとしている資質・能力についてのコード化による整理・分析 ・ 「卒業研究6」に関する生徒アンケート実施とアンケート結果のコード化による生徒が身についたと思う資質・能力と課題の整理・分析 ・ 「卒業研究」授業デザイン、指導の改善案の作成と検討 ・ 上記の「卒業研究」において育成しようとしている力・資質との連携を意識した教科指導のあり方の検討、教材や指導案や実践の検討・蓄積 ・ 教科を超えた授業検討会（3回、公開授業5つ）の実施 ・ 「市民性」「探究」についての先行研究調査 ・ 学校等の訪問による調査、研究会等への参加 ・ 公開研究会兼研究開発報告会（第1年次）の実施および参加者へのアンケート調査 ・ 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターとの共同実施である「東大附属学校の教育効果検証パネル調査」（以下、在校生パネル調査）実施

<p>第二年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 探究学習による深い学び実践についての資料収集のための学校等の訪問調査と研究会への参加 ・ 「卒業研究」授業の指導と評価方法等の改善案の検討 ・ 「課題別」「卒業研究」についての生徒アンケート結果の分析を通しての本校で育てたい「市民性」「探究」「協働」の具体的内容と関係性の検討および図式化 ・ 各教科における具体的な「市民性」の検討 ・ 教科授業での「市民性」「探究」「協働」を意識した指導案の検討と実践の蓄積、教科を超えた授業検討会（3回、公開授業3つ）の実施 ・ 「探究的市民科」授業の指導内容・評価方法についての検討とまとめ ・ 上記の、教科での検討項目と「探究的市民科」での検討項目の関連性の検討とすり合わせ ・ 新設教科の学習指導要領（カリキュラムデザイン）第1次案の作成 ・ 公開研究会兼研究開発報告会（第2年次）での実施 ・ 平成29年度「在校生パネル調査」実施
<p>第三年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 探究学習による深い学び実践についての資料収集のための学校等の訪問調査と研究会への参加 ・ 「探究的市民科」授業の指導内容についての検討 ・ 評価手法についての研究会の実施と「卒業研究」における評価の検討 ・ 「探究的市民科」6年間を見通して第一段階（入門1, 2）において身につけさせたい資質・能力の検討およびそれに基づく授業の確認 ・ 「入門」「卒業研究」に関しての生徒アンケート結果による効果の検討と課題の確認 ・ 教科授業での「市民性」「探究」「協働」を意識した指導案の検討と実践の蓄積、教科を超えた授業検討会の実施（授業検討会3回、公開授業8つ） ・ 新設教科学習指導要領に基づく授業実践（第1学年「生活デザイン」、第2学年「情報・技術」） ・ 1-2年における実践を基に「探究的市民科」学習指導要領（カリキュラムデザイン）第1次案の見直しおよび要領（カリキュラムデザイン）第2次案の作成 ・ 平成30年度「在校生パネル調査」による効果の検討 ・ 公開研究会兼研究開発報告会（第3年次）の実施
<p>第四年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 探究学習による深い学び実践についての資料収集のための学校等の訪問調査と研究会への参加 ・ 「在校生パネル調査」のまとめと結果の研究への反映 ・ 「探究的市民科」授業の指導内容・評価方法の改善 ・ 本校生徒の「市民性」「探究」「協働」に関する資質・能力についてのまとめ ・ 教科授業での「市民性」「探究」「協働」を意識した授業実践の評価と指導案の改善、および教科を超えた授業検討会（3回、公開授業8つ）の実施 ・ 新設教科の学習指導要領（カリキュラムデザイン）最終案の作成 ・ 公開研究会兼研究開発報告会（第4年次）の実施（最終報告）

(2) 評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ・6年生を対象として10月に実施した生徒アンケート分析結果からの「卒業研究」における指導効果の評価 ・運営指導委員会からの評価と公開研究会兼研究開発報告会での参加者からの評価 ・研究開発研究協議会での調査官の方々からの評価 ・校内研究会での研究内容、研究方法についての自己評価 ・公開研究会兼研究開発報告会（第1年次）参加者へのアンケート調査による評価
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ・3～5年生を対象として前年度3月に実施した生徒アンケート分析結果からの「課題別学習」における指導効果の評価 ・運営指導委員会からの評価と公開研究会兼研究開発報告会での参加者からの評価 ・研究開発実地調査での調査官の方々からの評価 ・研究開発研究協議会での調査官の方々からの評価 ・校内研究会での研究内容、研究方法についての自己評価
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ・2月、1～2年生を対象にそれぞれ「入門1」および「入門2」についての生徒アンケート分析結果から指導効果の評価 ・東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターとの共同である「東大附属学校の教育効果検証パネル調査」結果による評価 ・運営指導委員会からの評価と公開研究会兼研究開発報告会での参加者からの評価 ・研究開発研究協議会での調査官の方々からの評価 ・校内研究会での研究内容、研究方法についての自己評価 ・授業実践例に関する自己評価
第四年次	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度3月に6年生（当時）を対象とした生徒アンケート分析結果からの指導効果の評価 ・6年生を対象として10月に実施した生徒アンケート分析結果からの「卒業研究」における指導効果の評価 ・過去3年間、各年度末（3月）に1～5年生を対象に東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターと共同で実施している「東大附属学校の教育効果検証パネル調査」結果の比較・対照による評価 ・運営指導委員会からの評価と公開研究会兼研究開発報告会での参加者からの評価 ・研究開発研究協議会での調査官の方々からの評価 ・校内研究会での研究内容、研究方法についての自己評価

4 研究開発の内容

(1) 研究仮説

- ① 「探究的市民科」を柱に、新しい教科も含めたカリキュラムマネジメントを実現することにより、探究的市民の育成が可能になるであろう。また、「市民性」、「探究」志向性、「協働」性という統合的・実践的な資質・能力を適切に評価し、指導に生かすことで、探究的市民に必要な資質・能力を伸ばすことができる。
- ② 変化の激しい時代に国家・社会の責任ある形成者として生き抜く「探究的市民」に求めら

れるコンピテンシーとして、中等教育段階で身に付けるべき具体的な資質・能力を育成する。また、それらを育むうえで有効なカリキュラムや指導・評価の手法・在り方を明らかにする。その一つとして、従来の「総合的な学習の時間」とは違ったイメージの個人探究学習を可能にする6年間の系統的なカリキュラムを提案する。

(2) 教育課程の特例

- ① 「総合的な学習の時間」をもとにした新教科「探究的市民科」を設け、各教科での学びと合わせて、「市民性」と「探究」志向性育成の6年間での系統的な指導を進める。科目名は「探究的市民科／入門1」「探究的市民科／入門2」「探究的市民科／課題別3」「探究的市民科／課題別4」「探究的市民科／卒業研究5」「探究的市民科／卒業研究6」とする。なお、課題別3および課題別4は中等教育学校第3学年・第4学年生徒の合同クラスによる同時展開とする。「探究的市民科」は「他教科とも連携しながら、他者と協働し、探究的に学び活動する中でこれからの社会を生きる市民として必要な資質・能力を身に付けることができるようにする。」ことを目標とする。
- ① 全教科で6年間の系統的な「市民性」「探究」志向性の育成の指導を行う際に、前期課程と後期課程の連続性を保つとともに、各教科と「探究的市民科」を実践的な学習を通じて繋ぐ役割も果たすため、前期課程「技術・家庭」の技術分野と後期課程「情報」を一体化した新教科「情報・技術科」と、前期課程「技術・家庭」の家庭分野と後期課程「家庭」を一体化した新教科「生活デザイン科」を設ける。
 - A. 「情報・技術科」の目標は、前期課程においては「各教科で学んだ事柄を、技術の窓を通して社会とつなぐ」そして「後期課程の情報につなぐ」の2点であり、後期課程においては「様々な(情報)技術の原理は基礎的・基本的事項の組み合わせであること」そして「(情報)技術の活用は市民的対話で形成される合意事項、社会常識による評価を前提とすること」を実践の中で習得、体得させることとする。
 - B. 「生活デザイン科」の目標は、同じく各教科で学んだ事柄を日常生活に結びつけながら、前期課程の「家族を支える一員」としての立場から、後期課程の「家庭や社会の担い手」としての立場の変化を理解し、その実践の過程で「様々な要素を総合的に認識し、適切に判断する意思決定能力や課題解決能力」を養うこととする。

(3) 研究開発にあたり配慮した事項・問題点

- ① 研究体制について
 - A. 中核となる「探究的市民科」を新設するだけでは、学校の教育活動全体を通じたカリキュラム・マネジメントは難しいため、それを支え、また他教科との橋渡しを担う教科として前期課程「技術家庭科」の技術分野と後期課程「情報科」を一体化させた「情報・技術科」および「技術家庭科」家庭分野と「家庭科」を一体化させた「生活デザイン科」も新設した。

しかし、学習指導要領上の根拠教科である「技術・家庭科」と「情報科」「家庭科」の担当教員および授業数が比較的少ないことに十分配慮できていなかったため、この2教科を当初想定していた新教科「探究的市民科」と他教科との橋渡しの役割として組み込むカリキュラムデザインに無理(大きな負担)が生じてしまった。
 - B. 学校全体での研究を促進するために、全校で共通して育成する資質・能力として「市民性」、「探究」志向性、「協働」性を掲げ、同一歩調で授業を進めることと同時に全教科共通の土台をもって協議・検討できるようにした。しかし、曖昧な定義ゆえイメージ共有に研究期間のほぼ全部をかけ、実践の蓄積や効果検証と同時並行で進めることになった。

② 効果検証について

- A. 中等教育学校 6 年間を見通した系統的な学びのカリキュラムデザインであったが、4 年間という研究期間の制約を考慮し、同じ生徒集団の第 1 学年から第 6 学年までの縦断的なデータを収集することに替えて、部分的に学年間比較による効果の検証を行ったが、想定していた以上に当該学年の特性による影響が見積もられたため、本カリキュラムによる効果と学年カラーに起因するものとの分別を十分に行うことが難しかった。
- B. 本研究で注目する「市民性」，「探究」志向性，「協働」性は、社会・情動的スキルいわゆる非認知スキルであるため、要素還元論による分析が難しいため、アンケートによる主観的な結果を中心に効果検証を行うこととしたが、そのみに依ってしまった部分が否めず、もう少し客観的な調査の検討も行うべきであったかもしれない。

③ その他

- A. どんな内容を扱っていくかを中心とするコンテンツベースのカリキュラムと違って、コンピテンシーベースのカリキュラムでは、教科内・教科間の情報交換だけでは「意図」「主観的評価」しか共有しえないことが多く、連続性のある実践を行うためにも評価手法の確立が急務であることが浮き彫りになった。そういう意味でもポートフォリオ評価はコンピテンシーベースの指導に適していることが分かったので、評価の蓄積について要点（誰が、何を、どのように、どんな形で）を整理し、有効な評価手法を開発していきたい。特に、他校での実践へ広げていくには、負担感の増大を避けるような工夫が必要と考える。
- B. 「探究」志向性，「協働」性，「市民性」の育成については教科学習を中心に行いながら、それら 3 つの中身については教科の垣根を越えた議論の中で吟味されていくため、教科の独自性を生かした授業実践と教科の枠組みに囚われない協議の両立を図ることが難しかった。
- C. 学習者が「真に」主体的に学びを深めるアクティブ・ラーニング（ディープ・アクティブ・ラーニング）を実現するには、学び方だけでなく、評価においても教員によらず、自分でアセスメントを行い、自身の次の学びへつなげていけるようにする必要があると考え、生徒も利用可能な評価手法の検討を目指した。

5 研究開発の結果及びその分析

（1）教育課程の内容

【探究的市民科】

- ・「探究的市民科/入門 1」「探究的市民科/入門 2」においては、あらかじめ設定された幾つかの領域や範囲の中で、主にグループやクラス全体で課題を見つけ、フィールドワークを含む調査・研究・発表活動を行い、各テーマについて深く学ばせるとともに、探究的な学びを実現するための学び方・スキルについても学ばせる。その際、生徒自身の力で興味をもって課題を見つけられるよう、生徒にとって身近に感じられる領域や範囲を設定する。具体的には、様々な地域から通学していることを鑑み、本校周辺 2km 圏内や生徒自身が所属する東京大学、宿泊研修で訪れる旧街道など他の生徒とも共有可能かつ親近感がわくだけでなく、フィールドワークを行える場所という観点で選定する。
- ・「探究的市民科/課題別 3」「探究的市民科/課題別 4」においては、「自然・環境」、「人間・社会」、「科学・産業」、「創造・表現」の 4 つの領域からなる 13～15 程度のテーマ別講座の中から、生徒に 1 講座を選択させ、3・4 年生が一緒になって、そのテーマについてフィールドワークを含む調査・研究・発表活動を行いながら、深く学ばせる。開設する講座については、教員が探究的市民のロールモデルとなって突き詰めていく探究の作法・経験

を学ぶ場となるよう、教員の興味・関心を第一とする一方で、分野の幅広さを確保するため4領域を設定して生徒の選択肢（自分の“好き”を選べるとともに、蛸壺化させないこと）を保障する。また、講座によっては少人数での利点を生かして宿泊を伴うフィールドワークで集中的に探究できるようにするほか、異学年の生徒で構成されることを考慮して異学年交流や他者・社会との関わりについて、様々な視点から学べるように工夫する。

- ・「探究的市民科/卒業研究5」「探究的市民科/卒業研究6」においては、生徒個々に5年生・6年生共通で一つのテーマを設定させ、担当教員の指導の下に調査・研究・発表活動を行いながら、個人テーマについて深く学ばせ、最終的に卒業研究論文を作成させる。その際、理想論に留まったり一般論に終始したりせず、正解の定まらない問いに対する実践的な応えや解決策を、生徒個々がエビデンスに基づいて具体的に導き出せるようにする。
- ・各学年での評価・評定の在り方について、従来の方法を振り返りながら検討する。

【情報・技術科】

- ・新教科「情報・技術科」においては、技術・産業発展の時系列的に授業展開し、中学校「技術・家庭科」の技術分野と高等学校情報科の連携を図り、6カ年一貫した技術・情報教育のカリキュラムを編成した。
- ・1，2年次においては、科目「技術」を設置し、1学級単位で週1時間実施した。3，4年次においては、科目「情報・技術」を設置し、3年次は半学級単位で各週1時間、4年次は1学級単位で週1時間実施した。5年次は、必修科目「情報の科学」を1学級単位で総括的に実施し、6年次は、選択科目として情報科の応用的な「情報特論」、技術科の応用的な「生産システム技術」を各2単位で設定する。
- ・1，2年次の科目「技術」では、製図学習から様々なものの見方について学び、材料についての学習において、基本的な技能を全体での体験的な学びをし、各自でまとめ、技能のポイントを捉え、伝える発表活動をする。様々な材料の加工を通して、動力機構の学習、その機構を動かすためのエネルギーの学習へと発展させる。すべての題材を体験的に取り扱うことは難しいことや将来的な技術発展を考えると、技術観の育成が必要である。技術観の育成のために、体験活動や多角的な考察をふまえた表現活動を取り入れ、技術観の育成を促すこととする。
- ・3，4年次の科目「情報・技術」では、3年次で取り扱う内容としては、電気回路の実習を通して、計測制御、情報科学基礎、プログラミング基礎の内容を取り扱うものとする。前期と後期で分けて班学級編成をし、各科目担当教員1名ずつ計2名で同時展開をする。4年次で取り扱う内容は、モデル化とシミュレーションを通して、問題解決力や探究の力を養う。
- ・情報・技術科の大枠としてブラックボックス化した技術の原理を概念的に取り扱うことを主眼とし、その包括的な内容、及びカリキュラム化を目指して教育課程を編成、実践した。

【生活デザイン科】

- ・新教科「生活デザイン科」においては、教科の学習目標である「自立」と「共生」をキーワードに、生活に関わる事柄へ積極的に関心をもち、他者の考えも取り入れながら、豊かな人生を構築できるような判断力や実践力を育成する。
- ・「生活デザイン科」では、前期課程・後期課程で家族・家庭、衣食住、消費経済などの分野をスパイラル状に学習する。その際、発達段階に応じた課題設定を行い、高学年になるほど多面的な視点で課題への理解が深まる工夫をする。また、これらの題材を扱う際には、**他教科での学習内容や課題との関連付けにも留意する**（例：食生活-地理との連携）。例えば、食生活分野において、前期課程は家族の一員として食事や食文化を考え、自らの参画という視点で家庭生活について学ぶなど、身近なところから将来のことも考える学習を進める一方

で、後期課程では社会を担う一員として、また家族の中心として家庭を経営する立場からそれらを扱う。食料自給率を例に挙げると、前期課程では日本、特に地域の状況を家庭・地域とのつながりの中で探究し、「地産地消」も地域や家庭の視点から考えさせる。対して、後期課程ではグローバル社会の中での日本の立場も含め、包括的・多面的に議論をする。同じ「地産地消」を扱うとしても一次産業の在り方、環境問題などともつなげた上で、これからの自分たちの生活への興味・関心・実践的態度などを高めるよう工夫する。

- ・探究学習をどの学年でも重視して行うが、半学級編成で行っている3年次と5年次では、話し合い、インタビュー、発表、討論等に加え、実験や実習など体験の機会を重視した授業を活用する。例えば、保育分野や高齢者の分野においては、保育園見学・実習、妊婦・高齢者体験などを積極的に取り入れ、少子高齢化社会の現状を協働学習の中で多面的に考える。これらを通して、現代社会や各自の課題を自覚し、最終的にはどのような社会を目指すか、将来自分が子供を直接育てるか否かなどの個別の状況に関わらず、社会の一員として、また一個人として、自分自身の視点で適正に行動できるような実践力を固められる場とする。住生活分野での住宅設計であれば、自分のライフスタイル・ライフプランと結び付け、それにふさわしい家を設計する。その際、自分自身の考えを持つことはもちろんのこと、議論の中で他者のライフスタイルやアドバイスを取り入れることで、より深い学びを成立させる。これらは、探究的な学びの集大成である卒業研究と深くかかわっている。
- ・「生活デザイン科」で扱う内容は、個人の生き方につながるもので、正解が定まらない。また、個人の中でも常に変化しうるものである。このオープンエンドの課題について自ら考え判断し、行動できるような態度を育成したい。

(4) 実施による効果

① 生徒への効果

- A. 卒業生へのインタビューおよび校内研究会での教科の枠を超えた協議の内容から、入学当初よりどの教科も「正解」（が既に用意されていること及び、須らくそこへ到達させること）を前提としない授業が展開されていることが分かった。そうした学習を通じて「自分の答え」を作り上げていくスタンスが共通してとられていることで、探究においても自ら答えを生み出すことに生徒がすんなりと向かえるようになっていくことが推察された。
- B. 各教科において対話的な学びだけでなく「書く」機会が多いことは、表現力だけでなく、自己内対話を引き出しており、個の確立を促す環境や互いに尊重し合う土壌が生み出されていることが明らかとなった。

このことは、今年8月に行ったインタビューの中で卒業生が大学進学後に感じた他校出身者との違いとして「何かに熱量を傾けて取り組んでいることを互いに日々感じられた」「建設的に意見を出し合い、どんな人とも臆せず活発な議論をすることができる」点を挙げていたことから示唆された。

- C. 平成30年度卒業生の「探究的市民科が他の教科に比べて、それぞれの資質能力を身に付けるのに効果的だったか」についてのパネル調査（第4・5・6学年時）の回答から、「与えられた情報から自分なりに考え、判断する力」が3年間を通じて高い割合で評価されており、第4学年（課題別4）から第5、第6学年（卒業研究5・6）にかけて高く評価する生徒の割合が最も上昇したのが「他の人の考えを聞き、自分の考えを見直すという態度」であった。また、別項目の「探究的市民科で主にどんなことを行ったか」について回答の推移を追うと、より高度な知識や情報が必要となる卒業研究において、専門家などに聞く活動が横倍になっているのに対し、身近な人との意見交換は増加し続けていることが分か

- り、市民性の一つである「アマチュアリズム」が育成されていることが推察された。
- D. 「探究的市民科」の集大成である「卒業研究」では、特に「コミュニケーション力・対人能力」「計画性」「書く力」「論理的思考力」といった資質・能力の獲得が期待されることが第1年次の調査を中心に毎年の調査からわかった。
- E. 「卒業研究」の効果については進路への影響にも見られ、生徒アンケートからは直接的なつながりを挙げる意見は少なかったが、「自分の興味・適性・進路への確信」や「新たな興味・適性・進路の発見」など、**将来の学びや生き方につながる何かを得たと感じていることがわかった**。これは、卒業研究の期間を通じて幾度となく自己内対話が繰り返されるからであると考えられる。
- F. また、平成30年度から前述のパネル調査に「わからないことがあっても、何とかして解決しようと努力する」か否かを尋ねる項目を加えた。結果としては、学年が進むにつれて「わからないことがあっても、何とか努力する」生徒の割合が概ね増加する傾向が見られたが、単年度の実施であるため、本カリキュラムの効果によるものなのか、いわゆる学年カラーによるものなのか判断することはできなかった。加えて、第3学年と第4学年の間で落ち込みが見られたのは、中学校段階から高校段階へ上がることに伴う学習内容の難化によるものなのかどうか。継続的に調査を行うことで今後検証していきたい。
- G. 「入門1・2」や「課題別3・4」では、ともにこれらの授業で目指す「教科の学習を超えた学び」「体験型・参加型の学び」「自己の興味を拓ける学び」「探究型の学び」が実現されていることを多くの生徒が感じていた。一方、「**本物との出会い**」による学びの効果は大きいものの、**費用面での負荷も大きく、両者のバランスを今後考えていく必要がある**そうである。
- H. 「卒業研究」では、「**教員との関係**」と「**テーマ設定**」が成否のカギを握る2大要素であり、生徒も教員もそのことを自覚していることが分かった。また、アポイントメントをとったりインタビューで話をしたりする場面で苦戦する生徒が意外にも多いようで、交渉力をはじめとする**対外的なコミュニケーション能力**を準備段階で育成することの重要性も示唆された。その意味で、テーマを決める際に3人の教員から承認印をもらうことを必須とする「**はんこ回り**」の制度は、**その練習の場になっている**と言える。
- I. 教員も生徒も、探究的市民科と他教科との関連について、コンテンツベースではつながりを意識しにくいものの、**コンピテンシーベースではつながりを感じている**ことが示唆された。
- J. 卒業研究において同じ教員から指導を受ける同級生の存在について、大部分の生徒が肯定的に捉えており、直接的なサポートは少ないものの、自分の研究に貢献してくれたと感じている。探究の過程そのものは一人ひとりが自分の力で進めていかなければならないものであるが、それを支える土台には協働の力や市民性があり、「**市民性**」、「**探究**」志向性、「**協働**」性という**3つ資質・能力の統合によって個人探究学習が成り立っている**ことが示唆された。
- K. 生徒の意見を鑑みても、「卒業研究」指導日のペースは、現状の月1回を基本とするのが望ましいと考える。ただし、**夏休みなどの長期休みの期間にも入れる**ことを検討する必要があるそうである。
- L. 平成31年3月（第3年次）に実施した6年生へのアンケートの回答から、「情報・技術科」および「生活デザイン科」における**実践を通じた学びが、実生活への眼差しや学習において自分の感覚を養うことにつながっている**ことが確認できた。

② 教員や学校運営への効果

- A. 新設教科をはじめ、各教科で目指す「探究」志向性、「協働」性、「市民性」を基礎期・充実期・発展期の発達段階ごとにまとめた表を作成したことで、自分の教科で身につけさせたい資質・能力を系統的に整理でき、他教科の学びをコンピテンシーベースで明示的に共有することができた。視覚的に縦・横・斜めのつながりを捉えられるようになったことで、日々の実践の中で意識的に連携を行いやすくなった。
- B. 逆説的ではあるが、キーワードの曖昧さが教科内および教科の枠を超えた協議への必要性（動機）を長期にわたって生み出し、**教員同士の継続的な学び合い**につながった。その結果、各教員の授業に対する見方や指導法、目指すゴールや評価方法についての理解や考えが深まり、広がった。

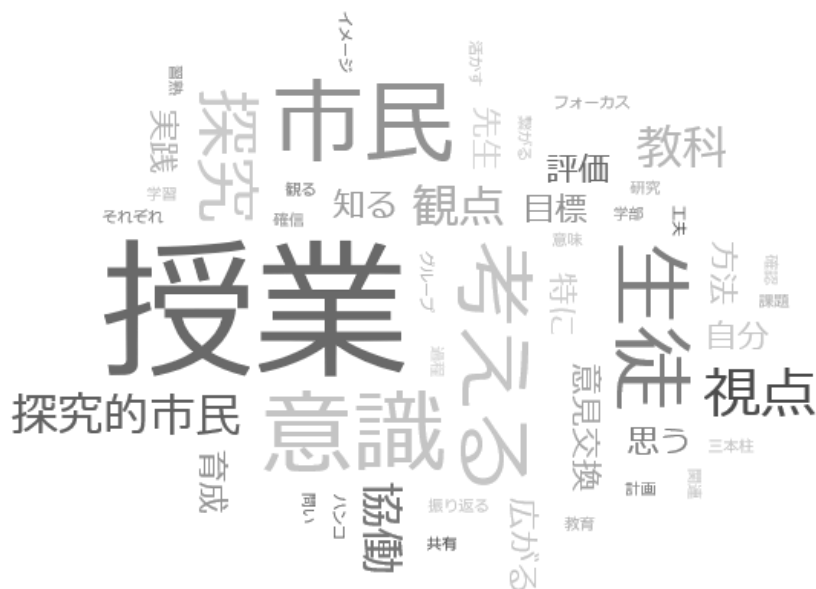


図1 本研究を通して得たものとして教員が挙げたキーワード

- C. 概念への理解が進むにつれて「市民性」、「探究」志向性、「協働」性が教員自身の在り方としても目指すべき重要な資質・能力であるという認識が進み、**教師の職能発達**に寄与したように見受けられる旨の指摘を運営指導委員から受けた。実際の感覚としても、生徒だけでなく教員についても本研究開発事業を通じてこれら3つの資質・能力が培われ、それが様々な指導の場面で生かされ、生徒への定着が促されたように感じる。
- D. 「情報・技術科」および「生活デザイン科」それぞれの独自性に基づく6年間を見通した内容編成および順序配列とそれを生かした系統的な学びが実現し、それぞれの教科がねらいとする資質・能力に焦点を当てた**連続性のある実践**が可能になった。

③ 保護者への効果

保護者向け学校評価において、探究的市民科が充実していることに対する評価が研究期間を通じて上昇した。また、6年間の系統的な学びに対する評価は毎年全38項目中最も高く評価され、「自主的な思考と判断力を育てている」、「伸びやかな表現力を育てている」など、本研究でねらいとしてきた資質・能力が生徒に定着していることも高く評価されていることが確認できた。

④ その他

卒業研究を終えた生徒へのアンケートから、「はんこ回り」をはじめとする**等身大の(生徒自身が納得のいく)課題設定**と、「卒研ハンドブック」に代表されるような、その時々

の成果と課題の内省・可視化・共有を促す**探索的ポートフォリオ**の2つが、「研究開発の概要」で掲げた個人探究学習の鍵となることがわかった。

等身大の課題設定

- 生徒が真に探究したいテーマか。
 - リソースにアクセス可能か。
 - 過重な負担にならず、継続できるか。
- (例) 「はんこ回り」

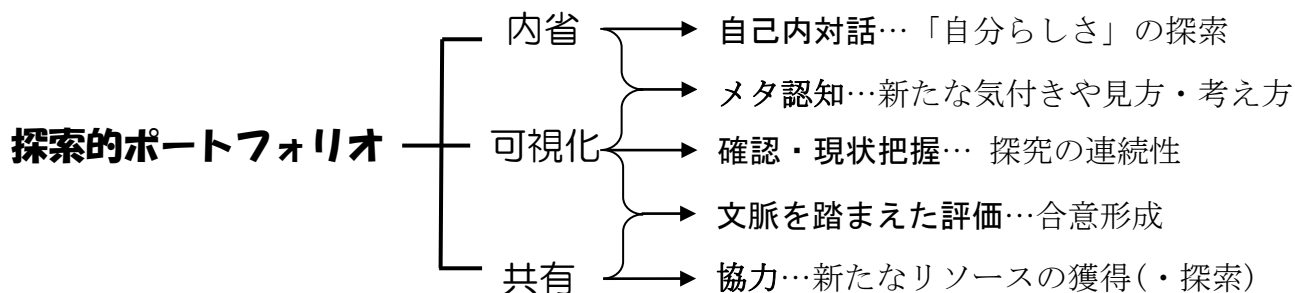


図2 「個人探究学習」を充実させる2つの鍵

6 今後の研究開発の方向

- A. 学校全体のカリキュラム・マネジメントを支えるべく新設した3つの教科のうち2つが教員・授業数ともに小規模であることに十分配慮できず、当該教科に過重な負担をかけ、その無理によって全体のカリキュラム・デザインにも多少のゆがみを生じさせてしまった。このことから、こうしたカリキュラムの中核を担う役割を果たす教科には、ある程度の教員規模と授業数が確保できるものを据えるか、中核となる小規模教科への連携・サポートを教科の垣根を越えて周りの教科が遠慮せずに提案していける組織づくりが望ましいと考える。
- B. 学校全体での研究を促進するために「市民性」、「探究」志向性、「協働」性という全教科共通の資質・能力を掲げたが、特に「市民性」の定義を実践レベルで十分に共有するまでに時間がかかってしまったが、新しい方向性（視点）を打ち出す際には、策定段階からの関係者全員の関与とともに、具体的な生徒の姿をもとに実践と目標設定（理論形成）の往還を繰り返すことが必要かつ有効であるとわかったので、次年度からの新たな取り組みに活かしていきたい。
- C. 最終年度になって、卒研ハンドブックに代表されるような形成的評価が本校の「ディープ・アクティブ・ラーニング」を可能にする要因の大きな一つであることが分かってきたため、長い歴史の中で多くの教員によって暗黙知として蓄積されてきたポートフォリオを中心とする実践の形式知化を図った。今後それがどんな点でどのくらい生徒の探究的な学びを支えているのか、量的データも用いて検証していきたい。
- D. 協働的な学びにおいては、明示的でないものも含め常に他者からのフィードバックがなされており、それが重要な形成的評価となっている可能性が示唆されたが、方法の難しさもあり検証できなかった。評価される側だけでなく評価する側にとっての効果も含め、継続して研究に取り組んでいきたい。
- E. 効果の測定の多くを主観的なアンケート結果に基づいて行ったため、別の客観的な方法も検討すべきであった。また、そのアンケートも、コンテンツベースの設問ばかりになってしまったために教科間のつながりを確認できなかったのではないかという指摘を運営指導委員から受けたが、その通りで、もっとコンピテンシーを意識できる問い方をすべきであった。

東京大学教育学部附属中等教育学校 教育課程表 (令和元年度)

	前期課程						後期課程					
	基礎期			充実期			発展期					
	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
国語	国語	4	国語	4	国語	4	国語総合	4				
									現代文B※	[2]	現代文B※	[2]
									古典B ※	[2]	古典B ※	[2]
											現代文演習*	[2]
										古典演習*	[2]	
社会 地理歴史 公民	社会	3	社会	4	社会	4	世界史A	2	世界史B※	[2]	世界史B※	[2]
									日本史A	2	日本史B	[4]
									地理A		地理B	[4]
							現代社会	2				
									倫理	[2]		
											総合社会研究 α *	[2]
				総合社会研究 β *	[2]							
数学	数学	4	数学	4	数学	4	数学I	3	数学II	[4]	数学III	[6]
							数学A	2	数学B	[2]		
									数学活用	[2]	数学活用	[2]
									数学演習 α *	[2]	数学演習 β *	[2]
											数学演習 γ *	[2]
											数学特論*	[2]
理科	理科	4	理科	4	理科	4	化学基礎	2	化学 ※	[2]	化学 ※	[2]
							生物基礎	2	生物 ※	[2]	生物 ※	[2]
									物理基礎	2	物理	[4]
									地学基礎		地学	[4]
											物理演習*	[2]
											化学演習*	[2]
											生物演習*	[2]
											地学演習*	[2]
				科学総合*	[2]							
保健体育	保健体育	3	保健体育	3	保健体育	3	体育※	2	体育※	3	体育※	2
							保健※	1	保健※	1		
							スキー実習*	[1]	スキー実習*	[1]	スポーツ科学*	[2]

音楽 美術 芸術	音楽	1.5	音楽	1	音楽	1	音楽 I	2	音楽 II	[2]	音楽 III	[2]			
							美術 I		美術 II		美術 III				
	美術	1.5	美術	1	美術	1	工芸 I		工芸 II		工芸 III				
							書道 I		書道 II		書道 III				
外国語	英語	4	英語	4	英語	4	コミュニケーション英語 I	3	コミュニケーション英語 II	[4]	コミュニケーション英語 III	[4]			
							英語表現 I		2		英語表現 II ※		[2]	英語表現 II ※	[2]
											Extensive English*		[2]	外国事情*	[2]
技術・ 家庭	家庭	0 (-1)	家庭	0 (-1)	家庭	0 (-1)			家庭基礎	0 (-2)					
									被服*	0 ([-2])	生活文化*	0 ([-2])			
家庭 情報	技術	0 (-1)	技術	0 (-1)	技術	0 (-1)			情報の科学	0 ([-2])					
											情報特論*	0 ([-2])			
新設教科 生活 デザイン	家庭	1 (+1)	家庭	1 (+1)	家庭	1 (+1)			家庭基礎	2 (+2)					
									被服*	[2] ([+2])	生活文化*	[2] ([+2])			
新設教科 情報・技 術	技術	1 (+1)	技術	1 (+1)	情報・技 術	1 (+1)			情報の科学	2 (+2)	情報特論*	[2] ([+2])			
							情報・ 技術 *	1 (+1)			生産システム 技術*	[2] ([+2])			
学校設定							情報・ 技術 *	0 (-1)			生産システム 技術*	0 ([-2])			
											総合心理 入門*	[2]			
									卒業研究 5	0 (-1)	卒業研究 6	0 (-1)			
総合的な 学習	総合学 習 入門 1	0 (-2)	総合学 習 入門 2	0 (-2)	課題別 学習	0 (-2)	課題別 学習	0 (-2)							
新設教科 探究的 市民科	入門 1	2 (+2)	入門 2	2 (+2)	課題別 3	2 (+2)	課題別 4	2 (+2)	卒業研究 5	1 (+1)	卒業研究 6	1 (+1)			
HR・道徳		2		2		2		1		1		1			
計		31 (0)		31 (0)		31 (0)		30 (0) (LHR を除く)		13 + 18 (0) (LHR を除く)		3 + 28 (0) (LHR を除く)			

学校等の概要

1 学校名、校長名

トウキョウダイガクキョウイクガクブフソクチュウトウキョウイクガッコウ
 東京大学教育学部附属中等教育学校 校長 カツノ マサアキ
 勝野 正章

2 所在地、電話番号、FAX番号

東京都中野区南台1-15-1
 電話番号 : 03-5351-9050
 FAX番号 : 03-3377-3415

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数<令和2年3月1日現在>

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数

(中学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
120	3	120	3	120	3	360	9

(高等学校の場合)

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日 制	普通科	118	3	122	3	110	3			350	9
	計	118	3	122	3	110	3			350	9
定時 制											
計		118	3	122	3	110	3			350	9

4 教職員数<令和2年3月1日現在>

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	2		2		35		2			13
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
1	2	7	2	67						